

線路の下に、アート空間

古い商店街の空き店舗で、青年が床に寝そべり絵筆を握っていた。「ちょっと入ってみませんか」。シャッターを下ろし、照明を落とすと、暗闇の中に青白い無数の光が浮かび上がった。

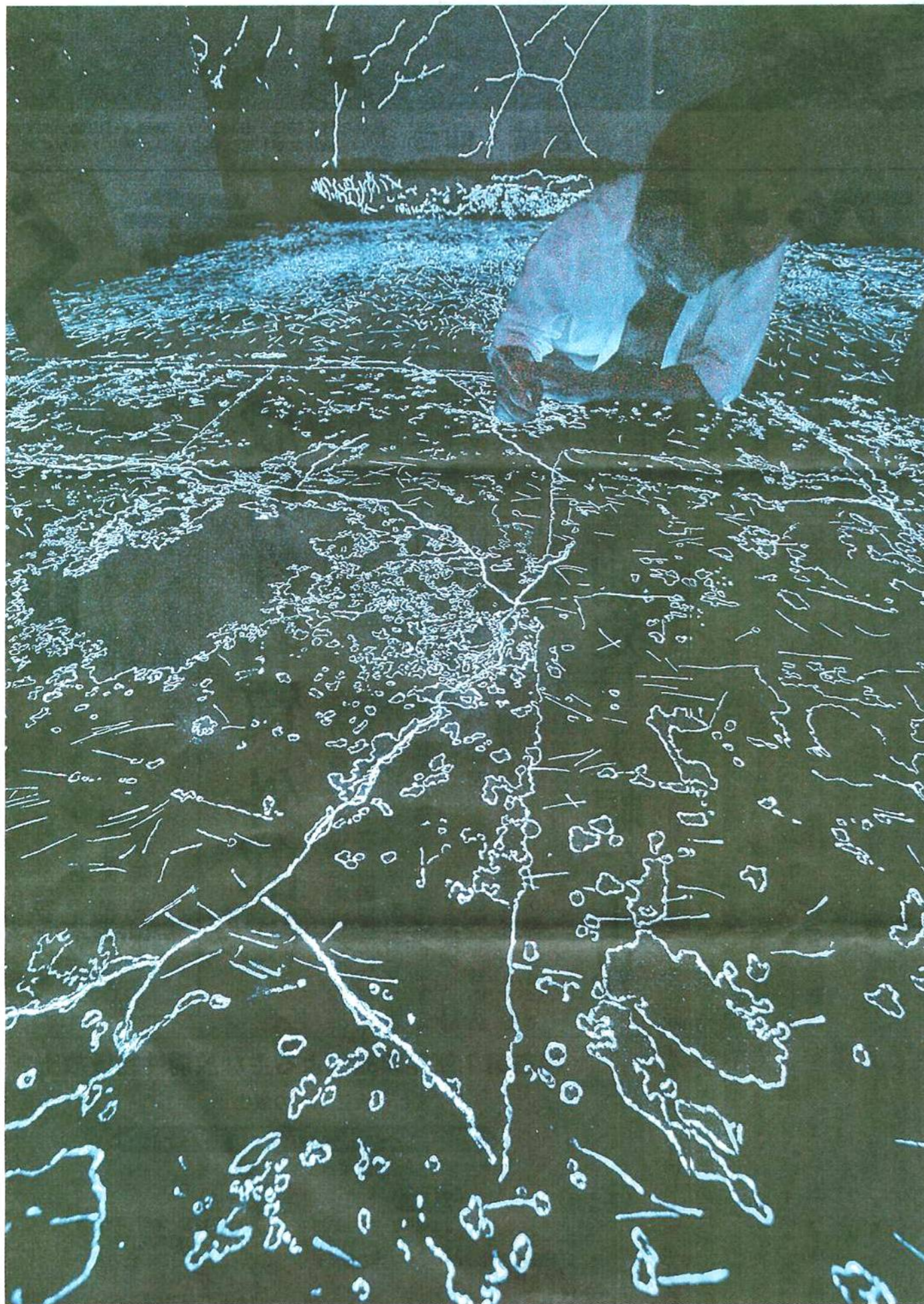
神戸市中央区の元町高架通商店街、通称「モトコー」で、芸術家

や学生が、13の空き店舗をアトリエ兼展示場に仕立てて作品作りに励んでいる。10月から始まる芸術祭「神戸ビエンナーレ2011」で、商店街全体を「街の美術館」にしようという試みだ。

作家らは、偶然出会った買い物客との会話をガラスに刻み込んだ

り、不用となった日用品を募って材料にしたり。戦後の闇市に由来するという高架下がもつ雰囲気や、独特の活気を作品に生かそうと奮闘している。

空き店舗を借す同商店街振興組合も好意的。「高架下の面白さを知ってもらおうチャンスだ」と、作



床や壁の傷に蓄光塗料を塗り、空き店舗の「記憶」を視覚化する戸井田雄さん(28)の作品=いずれも神戸市中央区元町高架通

scene 59

神戸・元町の 高架下で芸術祭

家にお菓子や飲み物を差し入れて応援する店主もいる。空き店舗は年々増えており、寂れていくモトコーを何とか活性化したい思いからだ。

暗闇に浮かぶ青白い光をよく見ると、床と壁に刻まれた傷や亀裂に流した蓄光塗料が光っているのだった。そこには港町の営みが刻み込まれているように感じられる。芸術の街モトコーが誕生しそうな予感がした。

(映像写真部 吉田敦史)

むき出しのコンクリートに囲まれた空間で制作を続ける本堀雄二さん(53)。商店街の客から集めたリサイクル品を使い独特な世界を演出

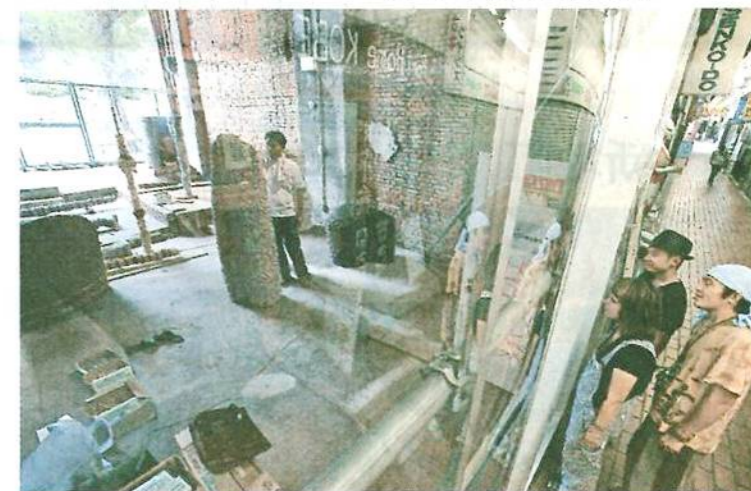


現代写界



切れた電球を集め、再び光を当てる岩塚一恵さん(30)。風化したものが美しい心象風景へ昇華することを表現している

買い物客や近隣の店主らが興味を持ってのぞき込む。「見る人の反応や空間に合わせて最初の考えと違う作品になっていく」と北川太郎さん(35)



◆次回は9月22日掲載予定です

gendai sha kai